

## カバイロシジミの累代飼育法

作成：2018.12.15 仲西周二



### 全般

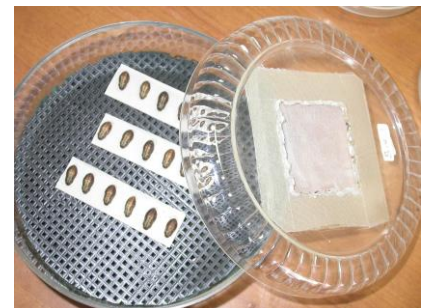
会誌「多摩虫」68号と71号に寄稿した本種の飼育雑感から、飼育上の要点のみを取り纏めた。

### 食草の準備

本種の食草は各種のクサフジで、いずれも多年草のクサフジ、ヒロハクサフジ、ツルフジバカマなどを試してみたものの栽培が難しく、花期も7月以降と遅くなって累代飼育には不向きであった。関東圏で入手・栽培が容易な点で、一年草の外来種クサフジ（ナヨクサフジ）の播種栽培がお勧めである。やせ地の肥沃化用の緑肥として使われるようで、大型の種苗店で種子が販売されており入手は容易である。秋播きすれば冬を越して4月に開花するが、花期は5月末までとなる。もう少し花期を長くほしいので、私はこの他に晩成種の種子を3月から4月に播種して、6月中まで花を確保している。支柱を立てた袋掛けに便利なので、8～9号鉢など大型の鉢植えも作っている。

### 蛹の保管から羽化

6月に蛹化した蛹は翌春までゼフィルス卵と同様に保管し（ゼフ卵の冬季室内越冬法を参照）、2月からは冷蔵庫に入れて羽化の斉一化を心掛ける。ギフ蛹と同様にミズゴケにくるむ方法でも問題はなく、湿度があれば丈夫な蛹である。4月初めに出庫して写真の様に居室内管理すれば、20～30日で羽化に至る。この間も湿度維持は大切である。



### 羽化～交配

4月末ごろに♂が先行して羽化し、数日遅れて♀が羽化する。羽化成虫は次に説明する吹流しに収容し、♂はしばらく飛翔させて成熟させる。♀は羽化当日が交尾に好適である。

使用する吹流しは、長さ34cm、直径22cmの筒型洗濯ネットで、トロ箱内に横置きに固定する。吹流し内に底から1/4ほどの深さまで赤玉土を入れ、トロ箱に僅かに水を張って赤玉土が常時濡れた状態を保つ。

成虫給餌用の草花（ヒメジオンなど）を小型ポリ瓶に水差して赤玉土に埋めて固定する。本種を含め小型シジミチョウの大敵は乾燥である。花蜜などの栄養成分は勿論大事であるが、随時吸水できる環境が望ましい。



直射日光のあたるベランダに装置を置き、羽化した♂♀を順次投入する。蝶は赤玉土上の狭い空間を活発に飛び、給餌植物で吸蜜したり赤玉土で吸水するのが観察される。順調なら♀投入から翌日中には交配が成立する。

### 採卵

交尾を確認できた段階で交尾♀は吹き流しから取り出さずにおいておき、吹き流し内に産卵用のクサフジの花茎を、給餌用草花同様ポリ瓶に水差し、蔓を横に這わせて入れる。花と蕾を抱える若い花茎が好適で、母蝶はクサフジの花からも好んで吸蜜する。交尾2日後ぐらいから母蝶の産卵が始まる。産卵は蕾に多いが花弁や茎葉にも産まれる。



### 孵化から若齢幼虫の飼育

大事に孵化させようと卵をシャーレ中に取り込んだ結果、全く孵化しなかった苦い経験がある。原因は分からないが、以後卵は容器内に取り込まず開放環境で孵化させている。例えば、鉢植え食草の葉叢に卵の付いたクサフジの茎を挟み込んで袋掛けする放任飼育はお勧めである。卵の付いた花茎を室内で瓶差しして孵化させ、食草を差し足して若齢幼虫期間の飼育を全うすることもできる。1～2令幼虫は葉を好んで食べ、花穂なしでも正常に生育する。脱皮して3令幼虫になると写真の様に好んで花穂を食べに集まるので、回収して容器内飼育に移行する。放任飼育の場合は、3令幼虫発生の段階で鉢植えに花穂が出ているのが大事である。



### 3令～終令幼虫の飼育

3、4令幼虫は専ら花穂を食べ、食欲は旺盛である。鉢植えの放し飼いで育ててきた幼虫も、カップ内で花穂を与える容器飼育に切り替えると良い。3、4令幼虫に与える花穂が大量に必要なので、花穂量が圧倒的に多い地植え食草が有利である。ゼフの飼育と同様に糞や食べ残しの掃除を欠かさず新鮮な餌を十分に与えれば、やがて大型の蛹を形成する。

3、4令幼虫にはクサフジの花穂に代えてスナップエンドウ、グリーンピースなど豆類の軟らかい果実を代用食として使用できる。この件は会誌71号の羽鳥信義会員の寄稿に詳しい。クサフジの花期と幼虫の生育ステージが合わない場合、もしくは十分に花穂が補給できない場合でも、代用食で飼育を完了できるので覚えておくと便利である。

会誌68号に書いたが、野外母蝶からの採卵の場合7月の飼育になる事が多いが、この時期のクサフジ花穂には幼虫の外敵が多い。卵や若齢幼虫が犠牲になって、蛹まで到達しないことが殆どと言っても過言ではない。栽培段階から袋掛けするなどして食草を隔離すればよいだろうが、外敵がまだいない5月の飼育、累代飼育がお勧めである。

以上